ディネの国から ―ナバホの子どもたちとわたし―

エイムズ唯子

第３回「セーラの大冒険」

ディネの国は、北海道をひとまわり小さくしたほどの面積で、アリゾナ州では最も北東の角っこに、お隣の州にはみ出すようにして広がっています。わたしたちが住むゲナードは、ナバホ・レザベーションの中では南に位置していますが、それでもメキシコとの国境に近い州都のフェニックスまでは、車で５時間の道のり。学校のほかには、小さな病院と郵便局、３つのガソリンスタンド、よろず屋にバーガー・キングがあるだけのゲナード村からみると、全米で６番目に人口が多く、文化も重層的なフェニックスは、おとなにとっても魅力的な大都会です。

この７月に１７歳になるセーラは２年前、ナバホ族出身の母親とフェニックスからゲナードに引っ越してきました。ベトナムからの移民である父親と母親が離婚し、セーラの祖母を頼って、母娘でレザベーションに移ってきたのです。中学校でいじめに遭い、通信制の高校に入ったけれどついていけなかった彼女にとって、新しい学校で友だちをつくるのは、代数や幾何にもまして難問となりました。エキゾチックなかわいい転校生に声をかけてくる男子生徒はいても、肩に力がはいるばかりにツンとすまして見えるセーラに、いっしょにランチを食べようと誘う女子生徒はなかなかあらわれなかったからです。「４年生になったら、フェニックスの高校に戻るからいいの」というセーラの言葉には、せいいっぱいの強がりと、かすかな希望とがいりまじっているようでした。

セーラが２年生の夏休みにフェニックスの父親の家の浴室で、自分の腕を切りつけたことを母親から知らされたのは、昨年７月のおわりでした。やっと入れた女の子グループのメンバーとフェイスブックでトラブルになったことと、お小遣いの使い方を父親に注意されたことが、セーラを絶望的な気持ちにさせたようでした。廊下や教室で、だれかが悪口をいっているのが聞こえると泣いて訴えていたセーラでしたが、通院と服薬をつづけながら、なんとか３年生を終えようとしています。

今、セーラとわたしは「マンザナールよ、さらば（Farewell to Manzanar）」という本を読んでいます。元カレがいる教室には入れないと言い張るセーラに、英語担当のウィルマン先生は呆れながらも、特別支援教室での個別指導を許してくれました。第二次大戦中に収容所に送られた日系三世の少女の手記を読む昼下がりは、日本人とアメリカ人という二重のアイデンティティーを持つ主人公と自分を重ねているらしいセーラにとっても、ところどころでてくる日本語の響きがなつかしいわたしにとっても、すぐに楽しみな時間となりました。スパイ容疑を解かれて家族のもとに戻れた父親が、収容所のバラックから失踪してしまうくだりで、セーラが「Disappeared?!」と悲鳴に近い声をあげたので、「どうしてだろうね」と応じながら、思わず「ヒッチハイクしたのかも」と言ったのは、つい先週、セーラが学校を抜け出して、フェニックスまでひとりでヒッチハイクしてしまったばかりだったから。そのことを話題にするのをためらっていたのでしたが、けらけらと笑い出したセーラにつられてわたしも笑っていました。あと１年手元で彼女の成長を見守りたい気持ちを教室にそっと残して、わたしはわたしの夏休みを楽しむつもりです。その後にやって来る、９ヶ月間余の格闘の日々に備えて。

ナバホ族の聖地のひとつ、モニュメント・バレー（ユタ州）にて